

研究主題「生涯にわたって音や音楽に関わることのできる生徒の育成

ー生活や社会、伝統や文化との関わりを関連付ける指導の工夫ー

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課
西東京市立青嵐中学校 主任教諭 佐藤 寛

第1 研究のねらい

中学校音楽科では、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断し、表現する一連の過程を大切にした指導の充実を図ってきた。一方、平成28年12月21日の中央教育審議会答申では、音楽科の課題として、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことが挙げられている。

平成29年度に都内公立中学校61校を対象に実施した本研究の調査では、生活や社会の中の音や音楽との関わりを実感させる授業を、年間を通してほとんど取り扱わないと回答した音楽科教師が約5割であった。こうした現状を改善するためには、表現及び鑑賞の指導の過程に、音や音楽と、生活や社会、伝統や文化との関わりを捉える場面を位置付け、生徒一人一人が、音楽的な見方・考え方を働かせる学習を積み重ねることが必要だと考えられる。

そこで本研究では、音や音楽と、生活や社会、伝統や文化との関わりに着目した指導方法を開発し、生徒一人一人の、生涯にわたって音や音楽と関わる力を育むことをねらいとする。

第2 研究仮説

表現及び鑑賞の活動において、音や音楽と、生活や社会、伝統や文化との関わりを実感し、関連付ける場面を題材指導計画に位置付け、生徒一人一人が、音楽的な見方・考え方を働かせる活動を積み重ねることで、生涯にわたって音や音楽と関わる力が育まれるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

音楽の指導に関する先行研究や各種調査より、次のことが明らかになった。

- (1) 中学校学習指導要領（平成20年3月告示）音楽科の目標に規定された「音楽文化について理解を深める。」は、中学校学習指導要領（平成29年3月告示）音楽科の目標ではより具体的に示され、今後一層求められる内容であること。
- (2) ESD（持続可能な社会づくりの担い手を育む教育）の視点を持ち、音楽科の学習を通して、社会とどのように関わっていくかについて考えさせたり、音楽文化の担い手としての行動化を図らせたりする学習が必要であること。

以上の基礎研究の成果を踏まえ、本研究では「生涯にわたって音や音楽と関わる力」を、「知覚・感受を支えとして、学んだことの意味や価値を考え、音や音楽に親しみ、考えていく力」と定義した。

2 調査研究

- (1) 音楽科教師対象調査（平成29年7月から9月まで、都内公立中学校61校62名）

生活や社会の中の音や音楽との関わりを実感させる授業の実態調査（質問紙選択法）

- (2) 生徒対象調査（平成29年9月、都内公立中学校4校第3学年生徒447名）

生活や社会の中の音や音楽についての意識調査（質問紙選択法）

(3) 調査結果から考えられること

音楽科の教師を対象とした調査の結果では、生活や社会の中の音や音楽との関わりを実感させる授業を、年間を通してほとんど取り扱わないと回答した教師が約5割であった。生活や社会の中の音や音楽との関わりを実感させる授業を実施している教師の具体的な指導の内容には、多くの学校で指導されて

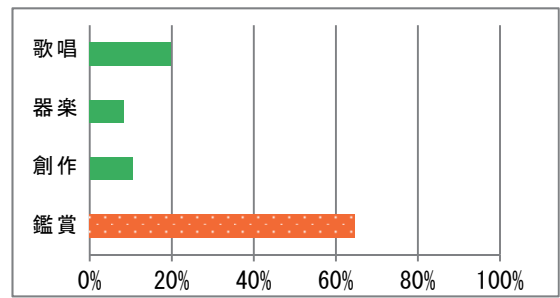


図1 生活や社会との関わりを取り扱っている領域・分野の割合 (教師対象。n=62)

いる歌唱共通教材や合唱曲、鑑賞教材が示されていた。この結果から、教師によって、指導内容と、生活や社会の中の音や音楽との関わりを結び付けようとする意識に差があると考えられる。また、歌唱や器楽、創作における実践が少ないことが明らかになった (図1)。

生徒を対象とした調査では、「音楽の授業の振り返りや自己評価が、自分がどのように成長し、考えが広がったり深まったりしたのかを理解するために役立っている。」の項目と、「音楽の鑑賞の授業で学んだことが、歌唱や器楽、創作の授業で生かされている。」の項目が、「ふだんの生活の中で、自分の生活をよりよいものにするために、音楽の授業で身に付けた知識や技能を生かすことができている。」の項目に対して、それぞれ正の相関関係が認められた ($r = 0.6$)。

以上のことから、自己評価や題材の関連性に対して肯定的な回答をしている生徒ほど、学んだことを生活に生かしている傾向にあると考えられる。

3 開発研究

(1) 音楽的な見方・考え方を生かした題材指導計画モデル

音楽的な見方・考え方とは、中学校学習指導要領解説音楽編 (平成29年6月) によると、「感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」とされている。このことを踏まえ、本研究では、生活や社会、伝統や文化と関連付ける指導の在り方に着目し、指導する際に必要な項目を挙げ、三つに分類した (表1)。

また、生活や社会、伝統や文化と関連付けて音や音楽について考える学習は、一つの題材で完結するものではなく、より長いスパンで実感させていくものと捉え、本研究では、二つの題材に共通する音楽を形づくる要素でつないだ題材指導計画モデルを開発した (表2)。

表1 生活や社会、伝統や文化と関連付けるための分類

A 自分にとっての身近な音楽	B 生活や社会の中の音や音楽	C 音や音楽の文化的・歴史的背景
歌謡曲、合唱曲、器楽曲、映画・アニメやCM、ゲームの音楽等	日常生活で聴こえる環境音・自然の音、施設やお店のBGM等	様々な国や地域、我が国の文化・歴史、風土や風俗、伝統芸能等

表2 題材指導計画モデルを適用した本研究の実践

題材	領域	時	音楽を形づくる要素	生徒の思考の流れ		表1との関連	
				知覚・感受する	活用する		
題材1	鑑賞	第1時	音色 リズム テクスチャ 構成	知覚・感受する	感じ取る	A	自分にとっての身近な音楽
		第2時			理解する	C	音や音楽の文化的・歴史的背景
題材2	表現 (創作)	第3時			感じ取る	B	生活や社会の中の音や音楽
		第4時			活用する		
		第5時				B	生活や社会の中の音や音楽
		第6時					
		第7時			実感する	A	自分にとっての身近な音楽/B 生活や社会の中の音や音楽

(2) 「生活や社会、伝統や文化との関わり分類表」

本研究の検証授業や、教師を対象とした調査における具体的な指導の工夫の内容、東京都教育研究員報告書等を基に、教科書の教材と、生活や社会、伝統や文化との関連を確認できる分

「生涯にわたって音や音楽に関わることのできる生徒の育成
 -生活や社会、伝統や文化との関わりを関連付ける指導の工夫-

類表を作成した。

(3) 「振り返りシート」

本時の具体的な目標を3段階で示し、目指す姿を生徒と共有したり、前時までの振り返りを確認したりできるように、題材ごとに1枚の「振り返りシート」(図2)を開発した。「振り返りシート」の最上段に初発の発問に対する考えを記入する欄と、最下段に同様の発問に対する考えを記入する欄を設けることで、生徒の考えの変容や深まりを可視化した。

4 検証授業(平成29年10・11月実施)

都内公立中学校第3学年生徒(4学級158名)を対象に、鑑賞領域で2時間、表現領域の創作分野で5時間、合計7時間の授業を実施して、開発した指導方法の効果を検証した。

(1) 音や音楽と、生活や社会、伝統や文化を関連付ける発問

二つの題材に共通する音楽を形づくる要素を、知覚・感受しながら音や音楽を感じ取り、理解・活用・実感する指導の過程で、生活や社会、伝統や文化との関わりをもたせた。その際、音や音楽と、生活や社会、伝統や文化を関連付ける発問をした。その結果、生徒の音や音楽に対する考えの広がりや深まりが見られた(表3)。このような生徒の姿から音楽的な見方・考え方を働かせていると考えられる。

表3 発問が影響したと考えられる振り返り(網かけは気付いたこと・ゴシック体は考えたこと)

	発問	生徒の記述(一部抜粋)
B (創作)	家の台所から夕飯を支度する音が聞こえて、音楽と思うかな。今聴いた台所の道具を使った音楽は、なぜ音楽だと思ったのかな。	今まで身近なものに「音楽」を感じることはなかったが、意識してみると本当に様々なところに音楽があふれていた。(中略)身の回りは興味深い音にあふれていて、 ふだん意識していない生活音も、立派な「音楽」であると私は考えた。人の心を動かす音楽をつくる人は、身近なところから音を感じ取っているのではないかと思う。
C (鑑賞)	ベートーヴェンは何を表現したくて、第4楽章を明るい曲想にしたのだろう。第1楽章と比べてどんな風変わったかな。	ベートーヴェンの歴史やエピソードを知ることによって、曲の背景に隠されたベートーヴェンの思いが分かった。 曲全体を通して、人々の自由への訴えが実現するまでの過程が表されているのだと感じることができた。

(2) 生徒の記述内容

音や音楽と関わる力を4段階に分け(図3)、鑑賞と創作、それぞれの題材のまとめの振り返りの記述内容と、全体のまとめである定期考査の記述問題の解答を分類し、集計・分析した。その結果、授業を積み重ねるごとに段階Ⅲ・Ⅳに到達した記述内容の割合が多くなるということが認められた(図4)。また、段階Ⅳに該当する記述内容の生徒の割合を、第2時の鑑賞のまとめと定期考査とを比較し、割合の平均値

Ⅳ	授業で学んだことを、生活や社会の中の音や音楽と関わらせ、今後どのように関わっていくかについて考えている。
Ⅲ	授業で学んだことを、生活や社会の中の音や音楽と関わらせている。
Ⅱ	生活や社会の中の音や音楽について考えているが、授業で学んだことと関連付けられていない。
Ⅰ	授業で学んだことを振り返っている。

図3 記述内容の段階

に差が見られるかについてt検定を実施した結果、1パーセント水準で有意差が見られ($t(138) = 7.93, p < 0.01$)、定期考査で段階Ⅳの割合が有意に向上したことが明らかになった。このことから、音楽的な見方・考え方を働かせた授業を積み重ねることで、音や音楽と関わる力が育

図2 「振り返りシート」(一部抜粋)

まれる傾向があると考えられる。

(3) 生徒の思考の変容

初発の問いと、題材のまとめの問いに対する生徒の記述内容を分析(表4)すると、生徒Aは、感じ取ったイメージの記述内容から、休符の効果を知覚・感受し、自分の生活経験である漫画のセリフから受けた印象と関連付ける記述内容に変化している。生徒Bは、限定的な音楽の捉え方から、自ら感じ取ることによって音楽になるという捉え方の広がりが見られる。生徒Cは、二つの題材に共通する音楽の要素の働きに着目し、鑑賞で学んだことを創作で生かすことで、実感を伴った理解となり、学びが深まったと考えられる。

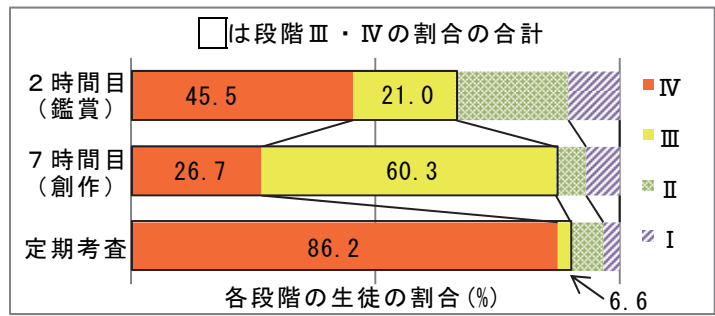


図4 記述内容の各段階の推移 (n=139)

生徒Aは、感じ取ったイメージの記述内容から、休符の効果を知覚・感受し、自分の生活経験である漫画のセリフから受けた印象と関連付ける記述内容に変化している。生徒Bは、限定的な音楽の捉え方から、自ら感じ取ることによって音楽になるという捉え方の広がりが見られる。生徒Cは、二つの題材に共通する音楽の要素の働きに着目し、鑑賞で学んだことを創作で生かすことで、実感を伴った理解となり、学びが深まったと考えられる。

表4 生徒の思考の変容 (生徒の記述より一部抜粋)

	初発の問い	題材のまとめの問い
	動機から何をイメージしましたか	動機から何をイメージしましたか
生徒A (鑑賞)	闇の中に落とされたような感じ。落ち込むような出来事。	よく漫画などであるセリフの、「ツツツ」が続くような感じ、ずしんと重くのしかかるイライラ、不安などを表している。
	あなたにとって音楽とは何ですか	音楽とは何ですか
生徒B (創作)	気分を上げたいときに聴いて楽しむもの。	人の心を動かし、その音から何かの思いや感情を感性によって感じ取ることのできるもの。
	二つの題材を通した振り返り	
生徒C	ベートーヴェンは動機の反復を多く使っていて、今回私の班も反復を使ったので、昔から音楽はあまり変わってないと思い、感動した。	

(4) 事前・事後アンケートの比較

「ふだんの生活の中で、自分の生活をよりよいものにするために、音楽の授業で身に付けた知識や技能を生かすことができている。」の項目に対して4件法で回答を得た結果、肯定的回答が検証授業後に上昇した(図5)。平均値に差が見られるかについてt検定を実施した結果、1パーセント水準で有意差が見られ($t(145) = 4.46, p < 0.01$)、肯定的な回答の平均値が、検証授業後に高まったことが明らかになった。

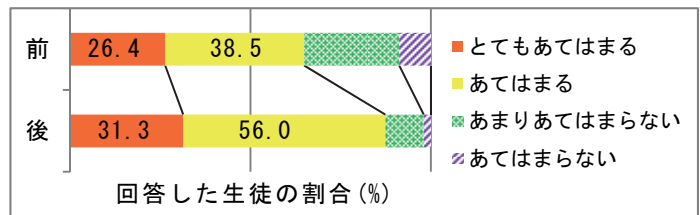


図5 事前・事後アンケートの意識の変化 (n=146)

第4 研究の成果

- ・音や音楽と、生活や社会、伝統や文化との関わりを題材指導計画に位置付けることで、音楽を形づくる要素とその働きについて、生徒が実感を伴って理解することができた。
- ・音や音楽と、生活や社会、伝統や文化を関連付ける発問によって、生徒の音や音楽に対する考えが深まり、音や音楽に関わろうとする意識を高めることができた。
- ・「振り返りシート」によって、音楽的な見方・考え方を働かせて音楽の学習を深めているかについて、一人一人の生徒の把握をすることができた。

第5 今後の課題

- ・音や音楽と、生活や社会、伝統や文化との関わりを位置付けた授業を、歌唱や器楽の分野においても実践し、充実を図る。
- ・音や音楽と、生活や社会、伝統や文化と関連付ける効果的な発問の工夫をする。
- ・年間指導計画を教科横断的な視点で作成し、開発した指導方法を活用した授業を実践する。